

## 安成通信 2016/12/12 時雨（しぐれ）考



この2, 3日、シベリアからの寒気団が訪れ、北海道や日本海側では今冬初の本格的な雪となり、京都市内は時折時雨（しぐれ）が降る日となっています。11月も後半以降になると冬型の気圧配置になる機会が多くなりますが、日本海側は雨や雪をもたらす積雲・層積雲が発達して雪やみぞれが降り続く一方、流れゆく雲は丹波高原・北山を越えるあいだに次第に弱まり、京都盆地に届く頃には雲と雲の間の隙間も大きくなり、雨は流れる雲により一時的に降り、雲が流れ去ると日が照るといふ、時雨の天気になります。時雨は、日本海側と太平洋側のまさに 境目特有の現象であり、京都は時雨ということばが生まれた地と言っても過言ではありません。

地球研は山沿いにあり、京都の街中より時雨の日々は多いですね。北山方面から層積雲や片積雲が流れてくるたびに一時的に激しい雨が降ったかとおもうと、すぐ日が照り、雲間からの光芒に遠い雨が輝き、時に低く淡い虹を見ることもできます。ダイニングルームの広いガラス窓から眺める時雨の風景は、秋から冬の季節における私のひそかな楽しみです。

時雨は、古くから多くの文人に親しまれてきました。

<しぐれそむる花ぞの山に秋くれて錦の色もあらたむるかな> 西行法師

この西行の歌にある「花ぞの山」は岩倉の里の北にある「瓢箪崩れ山」のことで、今も「岩倉花園町」の地名に残っています。

松尾芭蕉は時雨をこよなく愛でた俳人の一人ですが、時雨という現象に、西行風の「もののあわれ」とは異なる新しい境地の感動を付け加えました。

<初しぐれ猿も小蓑をほしげ也>

晩秋の山道でふいに時雨が降ってきた、わたしは蓑をすぐかぶったが、山道近くにいた子猿は可哀そうに雨に打たれたまま、自分も蓑が欲しいという顔をしてこちらを見ている、という句です。そこには時雨を通した人と自然の新たな関係についてのひとつの隠喩があります（宮坂、2009）。

<人々をしぐれよやどは寒くとも>

友人たちと泊まり込みの句会をすることになった、せつかくなら寒くてもいいから時雨が降ってほしい、という句ですが、「人々をしぐれよ」ということばには、寒くとも共に時雨に濡れながら、風雅を楽しもうではないか、という芭蕉の強い気持ちが込められています（山本、2012）。

京都に住んだ与謝蕪村も、時雨の句を多く残しています。

<鷺ぬれて鶴に日の照る時雨哉>

時雨が降っている、あちらの鷺は雨で濡れているが、こちらの鶴のところは日が照っている、という句ですが、一見似ている鷺と鶴も、時雨がそれぞれの美しさを引き立たせます。

<一わたし遅れた人にしぐれ哉>

川の渡しで、急に時雨が降ってきて乗り遅れた人が濡れてしまった、もうそんな季節になったのか、という句。俳句に添える俳画も得意とした蕪村の句は、より写実的といえますが、時雨を通して、人と自然の係わり合いを浮彫りにしています。

時雨などの季題は、万葉の頃から大和・京都などの畿内の<都人>が慣れ親しんだ自然の現象が元になっているようですが、宮坂(2009)によると、そのルーツは、さらに縄文人の山川草木や気象現象に対するアニミズム的感情にあるのでは、という興味深い指摘をしています。芭蕉は「奥の細道」などの「荒野」の旅を通して、忘れ去られていた縄文時代からの人と自然の関係性<即ち風土>の契機として、季語を再発見したのかもしれない。

参考文献：

宮坂静生(2009)：季語の誕生。岩波新書

山本健吉(2012)：芭蕉全発句。講談社学術文庫

